

## 2. デザイン・ガイドライン

---

(1) デザイン・ガイドラインの位置づけと役割

1) 位置づけ

文系地区デザイン・ガイドラインは、豊かなキャンパス空間を形成し、将来に渡り維持、活用し続けていくために、新キャンパス・マスタープラン2001に示されている新キャンパスへの統合移転における計画、設計、建設に関する基本方針を踏まえた「新キャンパスの空間配置と施設づくり」に関する指針である。

2) 役割

この指針は、建築物の配置、構造、デザインはもとより、景観や自然環境の下部構造を形成する地盤構成や水系・緑地・道路等から構成されるオープンスペースの設計、供給処理施設や各設備の設計の基礎となるものである。

特に文系地区においては、高台の敷地にあり学園通線や、市道からのアプローチに対する大学の顔として、また中央図書館など、九州大学新キャンパスにおける象徴的な空間として、外部への発信地点と位置付ける。

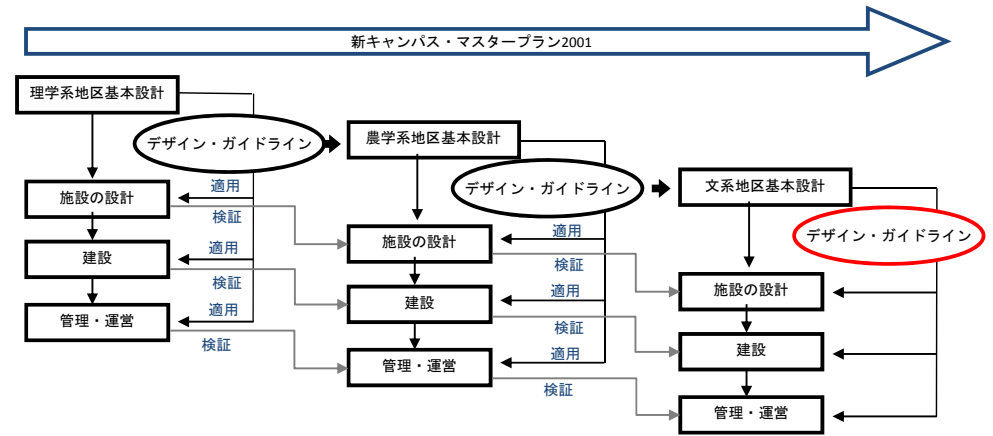


図2.1 デザイン・ガイドラインの位置付けと創造的継承のためのフロー図

(2) デザイン・ガイドラインの視点

デザイン・ガイドラインの視点は、新キャンパス・マスタープラン2001「新キャンパスの全体計画目標」を踏まえ

- ①大学の研究・理念、求められる機能の実現に関する視点
- ②歴史や伝統、自然景観の保全・形成に関する視点
- ③安心・安全で快適なキャンパス環境の実現に関する視点
- ④自然環境の保全・持続可能なキャンパスの形成に関する視点

の4点に分類し、それぞれに該当する具体的な観点、対象物を整理した。

共通ビジョン	
I. 歴史と伝統を継承し、新たな象徴性を備えるキャンパス環境	
II. 文系地区各部局と図書館の多様な活動を重視したキャンパス環境	
III. 地域社会、世界に貢献するために多様な交流を創り出すキャンパス環境	
IV. 地球環境にやさしく、持続可能な未来型モデルとなるキャンパス環境	
V. 安全、安心で快適なキャンパス環境	

デザイン・ガイドラインの視点	対象とする全体計画目標 新キャンパス・マスタープラン2001 「新キャンパス全体計画目標」より	具体的な観点、対象物
①大学の研究・教育理念、求められる機能の実現に関する視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学府・研究院制度の理念を実現する空間構成とその管理運営の確立</li> <li>・東西骨格に支えられる総合大学としての一体的な研究・教育機関の構成</li> <li>・経営を視野に入れた産業・地域連携との国際交流の拠点「タウン・オン・キャンパス」戦略的育成</li> <li>・民間施設等の活用や立地誘導による研究・教育の活性化と生活支援の促進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先進的な大学の研究・基本理念の実現場</li> <li>・アカデミックな空間と交流のための空間</li> <li>・象徴性と伝統の創出</li> <li>・学習の場</li> <li>・部局の独自性</li> </ul>
②歴史や伝統・自然景観の保全・形成に関する視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝統を創り出す象徴的空間と柔軟に変化・増殖する空間の共存</li> <li>・糸島地域の悠久の歴史と自然との共生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域性と固有の風景づくり</li> <li>・大学の顔</li> <li>・自然環境・歴史環境の保全</li> <li>・素材と色合い</li> </ul>
③安心・安全で快適なキャンパス環境の実現に関する視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心・安全で快適なキャンパス環境の整備</li> <li>・多様な技術に支えられたサステナブル・キャンパスの形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユニバーサルデザイン</li> <li>・わかりやすさ</li> <li>・開かれたキャンパスとセキュリティの両立</li> </ul>
④自然環境の保全・持続可能なキャンパス形成に関する視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糸島地域の悠久の歴史と自然共生</li> <li>・多様な技術に支えられたサステナブル・キャンパスの形成</li> <li>・新しいシステムの創造にチャレンジする実験都市の構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境負荷の低減と周辺自然環境の保全</li> <li>・ライフサイクルコストの抑制</li> <li>・維持管理が容易な施設計画</li> <li>・室内空気汚染物質の低減</li> <li>・環境学習装置としての仕掛け</li> </ul>

図2.2 共通ビジョンとデザイン・ガイドラインの関係

### 文系地区全体デザインの方針

デザイン・ガイドラインの視点に関して、「具体的な観点、対象物」ごとに環境・空間・テーマに関する基本方針を以下に示す。

#### 1) 大学の研究・教育理念、求められる機能の実現に関する視点

##### 【先進的な大学の研究・教育理念の実現場】

九州大学がアジアを軸とする世界各地の大学と学術交流を進め、優れた研究業績を生み出し、社会に多くの指導的人材を輩出してきたことを踏まえ、国際学術研究都市として、さまざまな国々、地域の人々の自由な創造活動を取り込み、活力を持續し、常により高度で先進的な文化・文明の創造と発信を行う場に相応しい環境と空間づくりを目指す。

##### 【アカデミックな空間と交流のための空間】

キャンパス空間は知の拠点としての建築と周辺のランドスケープが融合し、機能的に一体となったデザインが求められる。学生、教職員はもとより、大学の来訪者の記憶に残り、新たな出会いと刺激を与え続けうる空間が求められる。

##### 【象徴性と伝統の創出】

九州大学の独自性と伝統を継承し、新たな「九州大学らしさ」となり得るような建築デザインとランドスケープデザインが融合した象徴的空間を創出する。

##### 【学習の場】

九州大学の知の空間としての質をたかめ、伝統と文化を醸成し表現する場所として、文系地区におけるオープンスペースや施設内の随所に、学習意欲や知性を刺激する「見る見られるの関係」となる空間の仕掛け、展示、アートワーク設置のためのスペース、壁面等の設置を検討する。

##### 【部局の独自性】

8部局で構成される文系地区は各部局の歴史・文化・研究の独自性を表現しつつ、文系地区としての統一性にも配慮する。

#### 2) 歴史や伝統、自然景観の保全・形成に関する視点

##### 【地域性と固有の風景づくり】

糸島の悠久の自然との調和を考え、九州大学らしいアイデンティティのある新しいキャンパスの風景の創出を目指す。

##### 【大学の顔】

大学の基本的使命を担う大学の顔は、第一に「人」である。次にそれをサポートする環境や空間、人々が出会い、交流するための「場」の創出が不可欠となる。それぞれの場が大学内外と有機的に連携し、人が輝き、そこで生まれるアクティビティこそが「大学の顔づくり」となる。ファサードや外部空間の設えは、そうした人の活動が表出できるような空間構成を基本として考える。

##### 【自然環境・歴史環境の保全】

新キャンパスは、里山的な自然環境、埋蔵文化財などの歴史環境資源が貴重である。キャンパスのデザインは開発による環境変化を少なくし、ミチゲーションに配慮した計画とする。また、外観は屋上緑化を行う等、自然環境に対し配慮した計画とする。

##### 【素材と色合い】

施設や屋外構築物などの材料は、年月を経ても美しさを保ち、味わいを増していく素材を採用することを基本とする。キャンパスモール等のオープンスペースとそれに連続する建築空間は、相互に関連し

た色彩の調和を保つように配慮する。スカイラインを形成する建物頂部は空を意識し、周辺などの遠景からの見え方に配慮したデザイン、素材の選定を行う。

#### 3) 安全・安心で快適なキャンパス環境の実現に関する視点

##### 【ユニバーサル・デザイン】

文系地区の課題の一つである高低差を解消するため、ユニバーサルレベル（標高30m）を設定する。上下階に無理なく移動するためのエスカレーター、エレベーター、階段を設定し、万人が利用しやすく、かつ利用者の心身の健康に配慮した施設計画を心がける。

##### 【わかりやすさ】

学生や教職員はもとより、国内外の来訪者などに対し、はじめてでも分かりやすい、ゾーンごとの特色のある空間構成やサイン計画（英語・ピクトグラム等）を行う。

##### 【開かれたキャンパスとセキュリティの両立】

高速大容量の情報基幹ネットワークを構築するとともにシステムのノーマライゼーション化を行う。ユビキタス・コンピューティングなどの多様なサービスを提供すると同時に、虹彩認識等と組み合わせることで確実なセキュリティ管理との両立を図る計画とする。

#### 4) 自然環境の保全・持続可能なキャンパス形成に関する視点

##### 【環境負荷の低減と周辺自然環境の保全】

新キャンパスが豊かな自然環境を有する糸島地域と共生するために、建築物からのLCCO<sub>2</sub>の排出削減、循環型水利用システムの導入による汚水排水の削減、自然・新エネルギーシステムの導入等により環境負荷の低減に取り組み、周辺地域の水環境、大気環境、生物多様性の保全に努める。

##### 【ライフサイクルコストの抑制】

ライフサイクルコストの最小化を図るため、建築計画、構造計画、設備計画の連携による最適な建築物の空間構成と耐用年数の設定をはじめ、再生水利用を含めた給排水システムの構築、自然・新エネルギーを含めた電気エネルギー供給の最適化などに積極的に取り組む。

##### 【維持管理が容易な施設計画】

設備機器のメンテナンス、什器備品の更新、清掃の頻度や費用を一元的に把握するなどストックマネジメントの技術を導入し、一般管理者でも施設の維持保全業務が容易な計画とする。BMS（ビルマネジメントシステム）やBEMS（ビルエネルギーマネジメントシステム）を導入することで、施設管理を一元化し、人件費とエネルギーの低減を図る。

##### 【室内空気汚染物質の低減】

室内の空気環境において健康への影響を低減していくために、適切な材料選択、機械換気を行い、かつ自然換気、通風についても配慮した計画を行う。

##### 【環境学習装置としての仕掛け】

自然が有する未利用エネルギーを有効に活用し、限りある資源の消費量を抑えながら、環境への負荷を限りなくゼロに近づけるゼロ・エミッションを念頭においた計画とする。大学を環境共生型の目に見える教材、研究材料として活用し、ここで得られた成果が先進的な技術として社会に還元されていくエコ・ユニバーシティを目指す。